局岩藤
中老尾上

賀見八百屋錦繪

六ノ目　一六

草履打の段

〔解題〕天明二年正月二日から江戸薩摩外記座上場。作者容楊黛。

享保九年四月三日の事であるといふ、松平周防守の内邸に於て、局澤野(岩藤に當る)中老お道の方(尾上に)がその草履をはき違へたのを散々罵つて果てはその草履を爪先にかけてお道の方に抛つたのでお道の方はその侮辱を憤つて自害し、侍女おさつ(お初に)澤野を刺して復讐した。この事件を加賀騒動に取合せて、前記歌舞伎の「加々見山廓寫本」を飜案して、多賀家のお家騒動を足利家のそれにして脚色したもので、その大筋は次のやうである。

管領足利持氏老臣仁木將監等の謀叛によりて相模川(廓寫本では筑摩川)に於て暗殺せらる。同家の局岩藤叔父大膳と謀りて主家横領を企てたが、その密書を中老尾上に拾はれたので、岩藤は尾上に喧嘩を挑んで相手にして陷れようとし、遂に鶴が岡代參の時草履打の侮辱を加へた(六つ目)。尾上は主家の大事を思つてその場を堪へ忍び、局に歸りて遺書をのこして自害した。近仕のお初はその夜奥庭に岩藤を刺殺して主の仇を討ちて御臺より二代の尾上として召抱へられる(七つ目)。一方に於てお初の父高木十内は足利家の老臣神崎主膳の家來であつたが、主人主膳が惡人のために斥けられた後、致仕して鄕里鏡山に隱栖してゐる。こゝへ娘のお初は二代尾上となつて御臺の使として乘込み、かくまひ居る持氏の弟縫之介とその許嫁操姫とを鎌倉に迎へようとする。同家に食客となつてゐた主膳の弟畑介(廓寫本の又助に當る)は、惡人にたばかられて、相模川に於て蟹江一角を殺さうとして誤つて持氏を討つた科を自白して、縫之介に代つて自害して綸旨を惡人に奪はれた縫之介の罪を償ふといふに終る。九段目の十内住家の段は「廓寫本」の又助内の段の改作である。尤も現存の義太夫正本では「廓寫本」の方が後の作であるが、これは歌舞伎を淨瑠璃に仕立てたもの故「故鄕錦繪」の十内住家から出たのではない。

お初が出世して故鄕の鏡山に上使となつて錦を飾るのに、女の鑑と加賀騒動とを取合せて外題としたものであらう。

草履打の趣向は既に元祿十年正月中村座興行の「參會名護屋」に仕組まれ、その後も用ひられたものであつ

役割
露ぶ
竹中宣之丞
露沢林蔵
竹中友之丞
露沢熊蔵
長
竹中関之丞
露沢文吾
竹中伯之丞
露沢文蔵

たが、本曲に於てはこれを實說と巧に結び付けて效果を收めてゐる。本曲では六つ目と七つ目とが最も名高くて、初演の時は七つ目を語つた豐竹住太夫が好評であつた。而して翌天明三年二月大阪の竹本太市座で興行された時竹本住太夫七つ目で好評、爾來六つ目七つ目のみが流行したが、後には加賀騷動の色彩を明かにするためか、前に述べたやうに筑摩川や又助内の段が取合せられるに至つた。

歌舞伎では、江戸では、天明三年四月森田座で、又大阪では同年七月十六日から道頓堀角座で「鬼一法眼」の切に六つ目七つ目だけを出し、その後は諸座で繰返され、多くは彌生狂言として演ぜられ、一年一度お宿下りの御殿女中がこの芝居を見て、ふだん錦繪であこがれて居た役者の活動を舞臺の上に見たものであつたといふ。

地求馬は跡に只一人。文の返事をとやかうとスエテ暫し木蔭に佇めり。地斯くとはいさやしらにぎて。緣の糸いふ結合す人目をそつと腰元早枝。としやおそしと走り寄り。物をも言はず求馬が顏。スエテうらめしさうに打眺め。詞エエ聞えませぬ。アノ意地惡の岩藤が目顏を忍び轉び寢の。その睦言の度々に。地そなたを退けて。そもやそも外に枕は交はさぬと。言はしやんした其の時の其の一言を樂しみに。思うて居るに胴慾な。つれないわいなとばかりに合す人目をそつと腰元早枝。としやおほうど持てあまし。詞これは又嗜みやいの。人にこそよれアノ局を。イエ〳〵よもやとは思へども。油斷のならぬ男の心。私しや夜の目も合はぬわいな。ハテ疑ひ深いと手を取れば。地アヽ嬉しやと寄添うて。フシ割なき仲ぞ睦まじき。不義者見つけた動くなと。聞くより二人はつとばかり。思へど猶もそらさぬ顏。詞コレ申し必ず麁相おつしやるな。私が身にとり不義がましい。コレおしやんすな。たつた今も求馬殿と吸付いたり。引付いたり。抱付いたり取付いたり。したゝるい事の有り條。コレ此黑い目で見て置いた。サそれで

も何とあらがふかと。齒に衣著せずフシ言ひまくれば。地求馬は堪へずコレ岩藤様。詞人の不義を改める。こなたこそ不義の詮議。エヽ何ぢや。わしを不義の詮議といへ。オヽ其の詮議は此の文と。出して見すればはつとばかり赤面すれば早枝が引取り。コリヤ潔白なお局様ぢやわいな。不義はお家のきつい御法度。サア〳〵此方より申上げうかえ。サアそれは。但し拙者が言上いたさうか。サアそれは。サア。サア〳〵。アヽそんならもうよござるわ。不義の詮議は互に是切り。ナア求馬殿。スリヤ申分はござりませぬかと。早枝と目と目見合して。フシ別れてこそは立歸る。神樂歌勇ましき。かしこき神の神ナホヌいさめ。フシ折から告ぐる。地供廻り。イザ御立ちとゆふ映の。中老尾上先に立ち。多くの。女中が取圍み。行列カヽリ對の帽子も一様に。群れゐる鷺の如くにて。ナホヌ巽のフシ鳥居前。地イザお局様御一所と。いへど岩藤不承不承フシ立歸らんとする所へ。地來かゝる鷲の善六が兩手を土に。詞イヤ申しお局様。最前申し上げうと存じましたれど。かの事に取紛れまして。はつたりと失念仕りました。エヽ外の儀でもござりませぬが。此の間仰せ付けられました金の儀で。ヘイ〳〵〳〵御受取り下さりませ。地と半分いはせず。コレ善六。詞この岩藤は局役。むさくろしい物取扱ふ役ぢやない。其の金は召使の。澤に手渡ししやと地詞數。言はぬ色なる山吹のフシ包み取出し。詞ヤモ神佛より尊う思ふこの金を。むさくろしい物などとお手に觸れられぬといふは。アヽ又格別なお歴々様。うなる程金持つても。町人といふ者は賤しい者でござります。地と言ひつゝ金を懷へ。合お屋敷さして。フシ急ぎ行く。地跡打見やり局岩藤。詞なんと尾上殿。町人には珍らしいアノ善六。町人は賤しい者と。モ感心した今の言ひやう。ヤコリヤほんにこな様には差合ひであつたもの。オホヽヽオヽわしとした事がつか〳〵と氣の毒な。ホヽヽヽホ。イヤ何尾上殿へ。こな様の宿といふは金持なれど町人。假親してのお奉公。スリヤ今わしが言うた事。氣に障りやしませぬか。地と味な所へ仕掛ける意地と。思へどもわざとそらさぬ顏。詞これは又岩藤様の痛み入ります御挨拶。何の私が左様な事。ガおつしやる通り。親どもがお出入の緣を持ちまして。かやうな重い御奉公も。有難い身の仕合せ。根が町人の私がこと。さぞや不束な事ばかりでござりましよ。こ

の上とても岩藤様。憚りながらよい様に。地お差圖頼み上げます。と柳流しのしなやかに。ヲシいひ廻したる利發さト。調オヽ何ぢやえ。町人の娘御故。足らはぬ事を差圖してくれいかえ。エほんにつべこべ〳〵と。薄い唇ぢやなう。何のお前の御發明で。わたしが差圖受けさうな事かいなう。ヤ次手ぢやによつて言ひますが。こな様の親御と言ふは。お屋敷のお金御用を勤めやるといふ。その用達顔の高慢が。鼻の先へぶら付いて。コレこの顔に見えるわいなう〳〵。ヤ又上の事いふぢやないが。金の威光はきついものぢや。此の後とても其の金持顔やめにして下されヽ。ヤヽ。御役向はお中老。この岩藤は局役。オヽお局役。お表ならば御用人格ぢやぞや。女一通りは勿論。萬一狼藉者。又盗賊などが忍び入り。サ其の時は役柄ぢや。女ながらも御前の堅め。討止める器量がなけりや勤まらぬ御奉公ぢやが。定めて長刀の一手も心得がございやう。オヽソリヤアノ誰に稽古なさつたぞ。ヤアノ。そのお師匠様は何と〳〵ひますえ。コレ〳〵尾上殿〳〵〳〵。エヽヤマこな人わいの。人にばつかり物言はせ。こなたは耳でも潰れたか。地と嘴付けられて尾上は只。赤らむ顔を押隠し。お恥かしいヲシ事ながらその。心がけは調無いといふのか。アノ心がへはない〳〵。オホヽヽヽヽ。オヽ皆の者。アヽアレ聞きや。重い役を勤めながら。心がけは無いといの。アノ心がけは無いといの。オホヽヽヽヽ。ヤがに抜かんと立寄りしが。思ひ廻せば廻す程。大恩受けし御主人の御先途も見届けず。我が身に過ちあるならば跡に残りし親達の。御歎きは如何ばかりと。尾上はこたへ〳〵ても。無念の涙保ちかね。スエテ齒を喰ひしばり堪へ居る。調オヽ何ぢや泣かしやるか。オヽ悔しかろ。町人の娘でも。今では武家の御奉公人。オヽ悔しかろ。オヽ道理ぢや〳〵。ヲヽアレ見や悲しさうな顔わいの。オホヽヽヽヽアハヽヽヽヽヲホヽ〳〵〳〵〳〵ヲホヽヽヽ。ヤ最前も仰しやるには心付かぬ事あらば。御指南頼むと言はしやんしたの。地ムヽドレ教へてやろと立上り。持つたる扇振上ぐれば。身をかはして打落す。手向ひなさば一討ちと懐刀抜放せば。是はと驚く女中達。尾上も今はたまりかね共に抜かんと立寄りしが。思ひ廻せば廻す程。大恩受けし御主人の御先途も見届けず。我が身に過ちあるならば跡に残りし親達の。御歎きは如何ばかりと。こたへる辛さ。苦しさは。胸も張裂く

血の涙。身も浮くばかり歎きしは フシ〳〵騒ぐまい〳〵女中達。岩藤様がこを打見やり。堪へ〳〵し溜涙一度にわ
傍で見る目も哀れなり。詞ム、相手にの尾上を。御意見の爲の御打擲。わしつと伏轉びスエテ フシ身も浮くばかり歎
ならぬは此の岩藤が怖いのか。但し刃やもう有難うて〳〵。母様の御折檻と。レ〳〵申し尾上様。アノ憎ていなお局きしが。地數多の女中が立寄つて。詞コ
物三昧が恐ろしいか。オ、恐しい筈。地思うて此身のふし〴〵迄。有難うての。氣質は常からよう御存じ。お腹立ち
道理ぢや〳〵。そんならもうこりや納添い。詞ホ、ホ、ホ、、、、イヤ申し岩藤様。產みの親も及ばぬ御意見。エはお道理なれど。いつもの事ぢやと思
めましよの〳〵〳〵。ドレヤ納めましエ有難う存じまする。此の上は隨分と武藝をも心がけて。御奉公を致しませう。また此お草履は。私が爲に御教訓召し。必ずお氣にさへられずと。先づ
よわいの。ドレ〳〵歸りましよ〳〵。ヤほんにこな様にかゝつて。オ、これの此の一品。申し請けて私が守。地と〳〵屋敷へお歸りと フシ諫め立つれ
見やしやんせ。足袋も草履も砂まぶれになつたわいな。イヤ何尾上殿。何とこの草履の汚れたのを。拭いて下さん懷中したる心根は言はぬ色をやいひ草ば。地泣く〳〵も抱へ引締め立上り。
せぬか。アノ私に。オイノエ、いやか履。フシ胸に納めし利發さよ。地さすがの岩藤呆れ顏。詞何ぢや。その草履わし涙。はや寺々に。暮の鐘。あすは我
〳〵。ぢやと申してそれがマア。何ぢやそれがマア。サアサ、、拭いて下されし。テモマア恐しい辛抱な人ぢやな。意見した甲斐がある。以後きつと嗜ましやれ。サア〳〵〳〵行きませう〳〵。地
ごしせうより幸ひな此草履。地と脫ぐより早く追取つて。尾上が頭丁々々是ほとばかり奥女中。氣の毒あまり立騷ぐを。尾上は聲かけ。詞アヽコレ〳〵お暇申そとかへ草履心は跡に尾上をば眺み。フシ廻して立歸る。地尾上は跡

が身も。消えて行く。夕告げ鳥の泣く〳〵も打連れ。館へ 三重へ急ぎ行く